



## タンチョウ博士のお話（第23回）

### 〇タンチョウに緊急事態宣言！

カラスの鳴かぬ日はあっても（？）、新聞もテレビも、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を取り上げない日はない毎日ですが、皆さんはお変わりなく、お過ごしですか。

このウイルスに対し、4月に緊急事態宣言があり、5月に期間が延長されました。その間、ヒトは密閉・密集・密接の「3密」を避け、それで感染を防ぎ、犠牲者を出さないようにしたわけです。

実は、タンチョウでも、緊急事態宣言の必要性が30年も前から専門家により提唱されてきました。

でも、実際に政府機関が動き出したのはここ5、6年のことです。ただ、ヒトとの大きな違いは、タンチョウが悪性のウイルスにかかり、それで死んだ例はまだ報告されていない点です。

それなのに、なぜ緊急事態宣言が必要なのでしょう。それは、もし未知の悪性ウイルスがタンチョウへうつったら、最悪の場合、一挙に絶滅へ向かう恐れがあるからです。なぜなら、ワクチンや薬の開発は、ヒトの場合でも時間がかかり、難しいのに、“いわんやタンチョウにおいてをや”ですし、タンチョウは野外に居て密閉は避けられますが、冬は密集・密接の「2密」の状態になるからです。

しかし、ヒトが宣言を出しても、タンチョウが「ハイ、ワカリマシタ」と自発的に2密を止めるわけではありません。ヒトが手助けしない限り、危険はずーつと残ります。その手助けが、分散という方法です。



《写真1. 道東の給餌場で“密集する”タンチョウ》

タンチョウは今道内に1,700羽ほどいますが、その8割が釧路市・鶴居村・標茶町の限られた給餌場へ集まり冬を越します（写真1）。ヒトもタンチョウも含め、動物の体の中にいろいろな細菌やウイルスが住み着いています。何かの拍子でそのウイルスが、糞などを通じて別の種類の動物へ移り、移った先の個体を殺してしまうことがあります。ご存知の鳥インフルエンザは、本来カモの腸の中にある無害のウイルスが姿を変え、それを受けとった個体を殺す、つまり高病原性（病気を起こす力が強い）鳥インフルエンザウイルスとして、養鶏農家に打撃を与えます。

ツルでも、九州の出水平野へ集まるナベヅルやマナヅルが、鳥インフルエンザで死んだ例があります。タンチョウもいつ新型のウイルスでやられるか分かりません。それが起きてからでは手遅れです。

だとしたら、ツルにマスクやうがいさせられませんが、今できるのは、密集させず、分散させることです。それは越冬期だけでなく繁殖期も必要です。

今年、舞鶴遊水地で待望の繁殖活動が始まりました。道東の密集を抑え、道央への分散を進める、まさにその始まりです。地域農家の方だけでなく、長沼町の全員で、タンチョウの緊急事態宣言終結へ向けて、これからも見守っていきましょう。そのために、皆さんも新型コロナウイルスには十分ご注意を！！ツルもヒトも、ウイルスとの闘いは永遠の課題なのです。（文・写真：正富宏之）